

仕事や家庭で
頑張っている親へ
今だから言える
ありがとう。*Yell.*
～子から親へのエール2020～

普段はなかなか伝えることができない
親への感謝の気持ちを伝える論文コンクール

受賞作品集

— AND —

多様なライフスタイルを支える働き方や
働きやすい職場環境づくりに積極的に取り組んでいる

企業紹介

エール論文を
もっと多くの方に
届けたい。

今年度のエール論文を読んで、2つ「あれ？」と思ったことがありました。

一つは、ひとり親の家庭の学生さんからの応募が多かったことです。数えてはいませんが、例年に比べて多かったのは確かだと思います。ひとり親の家庭が急に増えるはずもないですから、なぜだろうと思っていました。審査が終わって分かったのは、岡山県外からの応募が例年以上に多かったことです。ここ2、3年ほどインターネット上のメディアでこのエール論文の情報が流れるようになったこともあり、全国の学生さんからの応募が増え始めているようです。昨年度の巻頭言で書いたのですが、応募する学生さんには、書いてみようというよりも、書かなければいけないという強い意志をもって応募される方が多くいます。ひとり親の家庭の学生さんは、その思いが強いのかもしれないと思いました。親の苦勞を子どもは知っているのだなと改めて感じました。

もう一つ例年と違うことがありました。エール論文にはその年々の世相や出来事が反映されることはそれほど多くはないのですが、今年はコロナ禍の中、苦勞されている家族の様子を描く作品が多くみられました。コロナが広く社会に影響を与え

ていることの表れだと思いましたが、特に医療従事者を家族に持つ学生さんの作品が目につきました。そういえば1、2年前の作品には、岡山の水害の中、苦勞されている家族を気遣う作品もありました。エール論文は世相を表すんだなと思いました。

こういった作品を読ませていただくと、エール論文をもっと多くの方々に届けたいと思うようになります。この冊子に掲載できなかった多くの作品の中にも、リアルで素晴らしいエピソードが描かれています。また、「面と向かっては言えないけれど、」と前置きをして、論文の最後にはずかしそうに感謝を伝える学生さんも多くいます。その作品を埋もれさせず、共有できるよう、作品を匿名化し、WEBに掲載しようと考えています。応募作品が多いため、そういった作業は個人では難しいことです。そこで、そういった作業をやっていただけの企業さんがありましたら、是非、本委員会に声をかけていただきたいと思っています。

正直私自身、なぜこのエール論文に自分の時間を投入するのかわかりません。ただ、言葉にはできない何か大切なものがあるのは確かだと思っています。

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
会長 寺澤 孝文
(岡山大学大学院教育学研究科 教授)

論文コンクールについて

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう。～子から親へのエール論文～」と題して、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性を主に家庭の視点から考えることを目的に、高校生・大学生等から論文を募集いたしました(2020年6月～11月募集)。

応募があった高校・大学等

岡山大学・大学院、香川大学、山陽学園大学、就実大学・短期大学、成蹊大学、東京農業大学、ノートルダム清心女子大学、立命館大学、早稲田大学、N高等学校、岡山県立矢掛高等学校、おかやま山陽高等学校、学習院女子高等科、川崎市立高津高等学校、渋谷教育学園幕張高等学校、湘南白百合学園高等学校、白百合学園高等学校、創志学園高等学校、津山工業高等専門学校、徳島市立高等学校、清心女子高等学校、一ツ葉高等学校、兵庫県立小野高等学校、立命館宇治高等学校

選考は、岡山県内の大学関係者による審査会にて行いました。今年度は、昨年度に引き続き、岡山県知事賞、岡山

経済同友会代表幹事賞、岡山大学長賞、入選、本コンクールを通じて多様性の教育推進に取り組んだ学校へ贈るダイバーシティ教育推進学校賞を選考いたしました。2021年2月10日に岡山県庁3階特別応接室にて表彰式を開催しました。

審査委員一覧(50音順)

岡山大学大学院教育学研究科
教授 片山 美香

山陽学園大学総合人間学部言語文化学科
教授 佐藤 雅代

就実大学大学院医療薬学研究科
教授 塩田 澄子(審査委員長)

岡山大学大学院教育学研究科
教授 寺澤 孝文

岡山大学大学院環境生命科学研究科
准教授 樋口 輝久

「ダイバーシティ推進実行委員会おかやま」について

当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。

実行委員会構成団体

国立大学法人岡山大学
一般社団法人岡山経済同友会
岡山県

事務局

株式会社ロゴデザイン



大学生部門
岡山県知事賞



「いつもの朝にいつものありがとう」

ノートルダム清心女子大学 3年 白神 ひかり

朝5時半、保健師の仕事で忙しい母の朝は「二種類ゆで卵」から始まる。実習続きで家事免除の私と食べ盛りの弟、そして健診者さんとの切れ目のない面談のために外食などできるはずのない自分自身のため、3つのお弁当を45分きっかりで作り終える。そして、7時出勤までの45分の間に、身支度から家事あれこれのすべてを終えて、家を出る。外で仕事をする母親なら、みんなそういう大変なルーティンをこなすはずだといわれるかもしれないが、それは違う。

「二種類ゆで卵」とは、朝まだ胃腸が完全に動いていない私や弟の身体に見合うやさしいとろとろの「半熟」。そして、昼のお弁当用には衛生面と見栄えの良さをねらった完璧な「完熟」。たった一個の卵にも家族への思いやりを詰め込む心意気に頭が下がる。「いつもおなじ」ということはとかく「ありきたり」「あたりまえ」と思われがちだが、いつものとおり、こなし続けるすこさに圧倒される。計算してみれば、これまで約5000個を優に超える数の卵を、茹で続けている母。生命そのものである卵を扱う母の姿ひとつにも、私は深い愛とその愛に生きる信念のようなものを感じずにはいられない。

おかあさん、
「毎日『今日も頑張ろう!』と言ってくれてありがとう」
おかあさん、
「毎日我が家の新聞配達員でいてくれてありがとう」
おかあさん、
「毎日の天気と傘の心配をしてくれてありがとう」
おかあさん、
「毎日法定速度ぎりぎりに車ぶっ飛ばして帰って来てくれてありがとう」
おかあさん、
「毎日結末のない話をにこにこ頷きながら聞いてくれてありがとう」

21歳の私が、小学生の時と何ら変わらない「ありがとう」を口にできるしあわせ。このしあわせを守ってくれているのも母である。

今年、念入りに準備を重ねてきたカナダ留学をコロナのせいで断念せざるを得なくなった。出発予定日の数日前までニュースとにらめっこ。結局、何とかコロナが収束して飛び立てますようにという私の願いは叶わなかった。どこにもぶつけられない怒りとともに、返金されなかった留学費用の額面を見て、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。一日中休みなく働きながら家計を工面し捻出してもらった尊いお金。そのお金を何一つ生かすことができなかった申し訳なさに押しつぶされそうになった。「ごめんね、わたしのために」「ごめんね、せっかくだったのに」と後ろ向きな言葉を繰り返す私の話をうんうんとどこまでも聴いてくれた後で、母はなんと、笑顔でさりと「さて、じゃあ次はいつ行く?」と言ってのけた。その母の言葉は、重りのついた私を、ぼうんと次のステップへ向かわせてくれた。おかげで今は、「じゃあ次は」の日を見据えて、この岡山の地で語学や地域文化を知る勉強に励んでいる。その姿を一番に応援して、喜んでくれているのもやはり母である。

ひとはしきりに<仕事>と<家庭>の両立とか<ライフバランス>という言葉を使いたがるが、母にとっては、仕事も家庭もすべてがごく自然に自分に繋がっていて、出会った一人ひとりと共に生きることがそのまま自分を生きることになっているのではないか。母親であるからとか保健師であるからという使命感でも自己犠牲でもなく共生の深い喜びの中で生きているからこそ、あんな風に心の底から嬉しそうに笑えるのだろう。作り物でない本物の笑顔を持つ母は、これから社会に出ていく私にとって、そのまま新しい希望の道である。私もどんな時も誰かのためにささやかでも温かい思いやりと頑張りを積み重ねられる人になりたい。

ゆで卵を食する日本の文化は、江戸時代から途切れなく続く。大げさに言うなら、母はその歴史を小柄な体と小さなホウロウ鍋で受け次ぎ、毎朝愛のゆで卵をつくっている。このささやかな幸福を更なる未来に繋げるべく、私がここにいる。今日もまた完璧なゆで卵。心から感謝して、「いただきます」。



高校生部門
岡山県知事賞



声に想いをのせて

おかやま山陽高等学校 2年 棗田 珠音

平仮名を覚えたての私が書いた手紙を一生懸命読んでくれ、嬉しそうに「ありがとう」と言って抱きしめてくれた母。しかし、今考えると、母にとって娘からの初めての手紙を読むことはどんなに大変なことだったか、私には想像することができません。

私の母は文字が読めません。文字が習得できない障害、いわゆる読字障害者なのです。我家は母子家庭で、母と子ども2人の3人で生活し、学校に出す書類など、全て子どもを通してのやり取りです。

15年前、あるテレビ番組で「読字障害」を知った母の友人の勧めで、母は病院に行き、そこで初めて正式に読字障害だと診断されました。それまでの母は、幼い頃から授業で板書されたことがノートに写し切れず、やる気がないと思われたり、やっと解いたテストの答案用紙には先生から赤いペンで「勝手に漢字を作らない」「あなたのイメージで文章を読まない」とコメントが書かれ、自分は頭が悪いと思い込んでいたのです。

私の小学校時代は、「お母さんには連絡するけど、プリントも渡してね」と先生に言われ、どうして私の母だけに電話をするのか不思議でした。その上、先生から特別扱いされているとクラスの友達から言われることも嫌でたまりませんでした。そんな私の思いとは違い、母はいつも明るく前向きです。学校行事や保護者会には他の誰よりも積極的に参加し、「体力には自信があるから、何でもしますよ」と言っっては、みんなが嫌がるような力仕事でも笑顔で引き受け、周りにいる男性陣をびっくりさせます。家族で出かけた時も分からないことがあれば、周りの人に声をかけ、不安なことや疑問に思うことがあれば、母の言葉と行動力で解決するのです。誰とでもすぐに仲良くなれる母のコミュニケーション能力にはいつも驚かされます。そして、どうしてそんなに明るく前向きになれるのか聞くと、

「障害があるからと言って、悩んで立ち止まるより、笑顔を忘れないことが大事。困ったら助けてほしいと言えば、誰かが助けてくれるから、皆を信じて前に進まなきゃ!!」

と、母は言うのです。そして、何事も諦めるのではなく、助けを借りても乗り越えようとする力が必要だと話してくれました。

体を動かすことの得意な母は、今仕事でトラックを運転し、家の解体作業に携わったり、事務仕事ではパソコンを使って資料や報告書を作っていますが、間違いがあるかどうか見直すことはできません。しかし、障害を理解してくれる仲間にもまれ、助けられながら母は笑顔で仕事が続けられているのです。障害があっても、それを理解してもらえるように笑顔で生活することと、周りの人の障害への理解と協力が必要なのだと、母を見ながら思うようになりました。

日本では、読み書き計算ができなければ「立派な人間ではなく、仕事もできない」という固定概念がまだ残っています。しかし、読み書きができなくても、持っている才能を活かし、得意な分野で幸せに生きようと努力している人もいます。障害を理解してくれる人が一人でも増えれば、障害を持った人の魅力や可能性を無限に広げることができると思います。

将来私は、障害について学べる医療系の大学に進学し、文字や数字が読めない人の力になりたいと考えています。そして、母のように、読字障害があっても適切なサポートがあれば、持ち味を生かしながら活躍できることを知ってもらい、誰もが輝ける社会を目指したいのです。障害を理解し、互いを認め、尊重し支え合える社会の実現を信じて、私はこれからも前に進んでいきたいのです。

口下手な私は、この想いを母に伝えたことはありません。だからこそ、母に宛てたこのエール論文で文字に想いを込めるだけでなく、私の声に想いをのせて母に届けようと思います。そして、普段は恥ずかしくて伝えられない想いをこれからは言葉と声を通して伝え続けます。



高校生部門

岡山経済同友会代表幹事賞



「わたしのお父さん」

津山工業高等専門学校 2年 牧野 あやの

私には、三人姉弟を育てる、シングルファーザーの父がいます。約六年前に母を病気で亡くしてから、祖母をはじめ色々な人から協力や助けを得ながら暮らしています。

父は「今の仕事だったら家族の時間が取れない」「学校などのことで簡単に休みが取れない」という理由で長年働いていた職場を退職し、今は祖母が経営するデイサービスの施設で働いています。転職してからは、それまで朝一番に家を出て、一番遅くに帰っていた父が、朝は私たち姉弟が学校に行くのを見送り、夕方私たちが帰るともう家において、「おかえり」と出迎えてくれます。

六年前までは、「昭和のお父さん」という感じでした。私たち姉弟が悪いことをすると叱ったり、遠出の時はずっと運転をしてくれたりしましたが、家庭のことは母に任せきりというスタンスでした。だから、最初の頃は仕事と育児に加え、慣れない洗い物や洗濯、掃除などの家事をこなしていかなければならないことに、かなりストレスがあったと思います。

また、学校関係においては、それまで入学式と卒業式ぐらいしか行っていなかったのですが、母親の出席が多くを占めるであろう保護者会から授業参観、個人懇談まで、母が行っていたことをすべて担ってくれるようになりました。私たち姉弟も約六年の時を経て成長し、できることも増え、家事などを行うようになりましたが、当時は違いました。父は大切な人を亡くした悲しみで心や環境の整理もついていないうちに、こなさなければいけないことが積み重なって行って、心身ともにいっぱいだったと思います。しかし、私たち姉弟には、そのような素振りは全くと言って良いほど見せていませんでした。

このようなことを考え出してすぐに弟の誕生日があり、家族で焼肉を食べに行きました。その日までは父を意識して見ていなかったのですが、意識して見ると、「お父さんってこんなに笑顔だったっけ」「以前よりも口調や声のトーン、表情が優しくなった気がする」と

思いました。その後、父に「やっぱり一人で三人を育てるのって大変？」と聞きました。すると父は、「そりゃあ、もちろん大変だよ。でも、助けてくれる人たちがたくさんいるし、三人がいてくれるだけで十分だよ。」「最初は他人から『あの子の家庭には母親がいないから・・・』と言われてないように思っていて、少し気が立っていた。でも、今は少し心に余裕ができていますよ。」と言いました。それを聞いて、「そうだったんだ。私には想像もできないプレッシャーや苦悩があったのかな」と思いました。それと同時に、今はまだ迷惑や心配をかけていて、父に動いてもらわないといけないことがほとんどなので、早く自立して安心させて、今までの感謝を倍にして返せるように親孝行をすると心に決めました。

世の中には、私の父のようなシングルファーザーの方やシングルマザーの方は、大勢いらっしゃいます。中には、環境に恵まれていて、たくさんのサポートを受けながら暮らすことができる方もいれば、なかなか良い環境に恵まれず、常に苦悩を抱えて暮らしている方もいると思います。そのように、それぞれの家庭には、それぞれの形や環境があります。

日本人の特性なのか、手を差し伸べることにに対して恥じらいを持ったり、手を差し伸べた人に対して陰口を言ったりする人が多くいると感じることがあります。そのような人がいる限り、ダイバーシティを実現することは不可能だと思います。一人ひとりが考えを改めたり、価値観を広げたりすることが、ダイバーシティ実現への近道であり、一番の策です。私は、家族や家庭に「普通」はないと考えています。これまでたくさんのサポートを受けて、良い環境で暮らせてもらった分、助けを求めている人がいたら、できる限りのサポートをしていきたいと思っています。



大学生部門
岡山大学長賞



母を助けた私の料理

山陽学園大学 2年 三宅 萌未

私が母に教わった初めての家事は「料理」だった。私の母は料理が上手で、母のように料理を作ることができるようになりたいと小さな頃から思っていた。母にその思いを伝えると、「そんなに上手くないよ」と謙遜した。そして、小学校中学年の頃から私は母と夕飯を作るようになった。はじめは包丁を握って簡単な下ごしらえしかできなかった。しかし、さすがは料理上手な母で、教え方もとてもうまかった。私の料理の腕は見る見るうちに上達し、小学校を卒業するころには、自分で料理一品を任せてもらえるほどになった。私の料理の様子を見て母は「もう教えることなくなったね」と言った。その顔はとても安心しているように見えた。

中学校にあがり、私は母と夕飯を作るのを分担することになった。週に四回私が夕飯を担当し、週に三回母が担当するという、母より私の方が多く分担するというやり方になった。母は私が夕飯を手伝ってくれることにとても感謝をしてくれた。朝、昼、晩と料理を作るのは大変なんだとそんな単純な思いしか、この時はなかった。夕飯の分担は私が高校を卒業するまで続いた。

大学生になって、私はアルバイトを始めた。そのため、夕飯を全く作ることができなくなってしまった。アルバイトをすることに母は反対をしなかった。自分のためにお金を稼ぐことは悪いことではないし、社会勉強のためにもやって損はないと快くアルバイトに賛成してくれた。この時の私には罪悪感があった。いつも手伝っていた夕飯を全く作ることができなくなることで母を困らせてしまう、母に大変な思いをさせてしまうのではないかと心配になった。しかし、アルバイトも自分のためにしたかったことは事実であり、母の賛成もあって私はアルバイトをすることにした。

アルバイトを始めて、私は夜遅くに帰ることが多くなった。夜十時過ぎに家に着くような電車に乗り、駅から家までは車で送り迎え。その送り迎えも母がしてくれていた。家に帰ると母が作った夕飯が準備されていた。その料理を見て、「なんだ、私がいなくても料理は大丈夫なんだ」と私は思った。その次の日もまた次の日も、母は私に夕飯を準備してくれていた。母は一言も私

に夕飯を作ってほしいと言わなかった。だからか、私はアルバイトを優先するような生活をしていた。

アルバイトをし始めて一か月くらいが経ったとき、いつものようにしてくれる送り迎えの車の中で母は言った。「もう料理は作らないの?」と。その一言に私は少し怒ってしまった。今まで何も言わなかったのに、なんで今になって言うのかと思った。母は静かに答えた。「娘のやりたいことはなんでもやらせてあげたいから、今まで何にも言わなかった。でも、やっぱりあなたの夕飯がお母さんは食べたい。あの時はほんとお母さんは助かってたんだよ」と。それを聞いて、私は少し泣いてしまった。何も言わなかったのは私のためで、私のために我慢してくれていたことを知った。本当は毎日夕飯を作ることにストレスを感じていたのかもしれない。それを気付いていなかったのは私で、何も知らなかったのは私の方だと、心が痛んだ。そして母は私の夕飯をいつも楽しみにしてくれていて、私の夕飯が母を助けていた。私はごめんと謝った。母は謝る必要はないと言った。だけど、私は謝ることしかできなかった。そのやり方でしか、母に思いを伝えられないと思ったからだ。母は少し黙って、口を開いた。「じゃあ、週に一回でいいからあなたが夕飯を作ってね」と言った。私は頷いた。

それから、私は週に一回、夕飯の日を設けている。アルバイトも大事だと母は言ってくれたので、どちらも両立できるようにアルバイトの数を少し減らした。母は嬉しそうに私の夕飯を食べる。私の料理は母を助けられる。その事実が私は嬉しかった。これからは私は夕飯を作り続けようと思う。母の笑顔がみたいから。何より母を唯一助けられる自分の武器として。料理をすることはいつか誰かを救うことにつながる。私はそう思っている。



高校生部門
岡山大学長賞

あなたのために

兵庫県立小野高等学校 2年 日高 愛香

父は、20年以上前から持病を患っている。発病したとき私は生まれていなかったので、物心がついた頃にはすでに長期の入院と退院を繰り返し、職も転々としていた。今思えば幼い頃の父の記憶があまりない。パパっ子だったはずなのに。…パパっ子……そういえばそんな時期もあったなと思う。

父の持病は鬱病だった。しかしそれを知ったのはここ数年の話で、「鬱」なんて言葉を理解できない幼かった私は、父の苦しみ、父の置かれている状況を長い間何も知らずにいた。

度重なる父の長期休暇や転職で生活にもゆとりがなくなり、母は兄が小学2年生になった時期に働き始めた。その頃私はまだ3歳だった。1日の大半を保育園と祖父母宅で過ごす毎日は、今振り返っても楽しかった。そしてそれは、寂しさに勝る愛情を、祖父母がかけてくれたからだと今になって気付く。しかし色々なことが理解できる年齢になり、友達の家に行ったり話を聞いたりするたびに、私はある思いを抱かずにはいられなかった。

“羨ましい”

私の中に芽生えたこの感情は、憧れではなく、心の叫びに近い。

自分の周りに存在する家族はみな、どこか我が家とは違って、暖かさがあつた。そして家族の輪が保たれていることが痛いほどに伝わってきた。それに比べ我が家は、共働きの開始を機に家庭内の雰囲気は悪化していった。会話ししい会話も消え、母の疲れ果てた顔とまるで廃人ようになってしまった父の姿を見ることだけが増えていった。そのとき私は、父を恨んだ。あんなに大好きだった父を恨んでしまった。父がこうならなければ、母があんなに苦勞することも、私が辛い思いをすることもなかったのに。そこから私は一方的に、父に対して冷たい態度をとるようになる。父の病気のこともまだ十分には知らなかったのに。

それから数年、父の病気について理解できるようになってからも、私は父への接し方を変えることはできなかった。むしろどんどん悪化していたようにも思える。その時の父の気持ちは計り知れない。そしてそれを裏付けるかのように、父の入院スパンはどんどん短くなっていった。それでも父は、仕事復帰をした。何度でも何度でも、

どれだけ時間がかかっても、父は自らが立ち上がることをやめなかった。

父の話では、最初に勤めていた会社では、復帰後は営業などを行う総合職の地位のまま一般職へ移り負担を軽減してもらい、また今勤めているところでは、時短勤務や、負担の大きい窓口業務ではなく、接客業務のない事務所内での勤務に代えてもらったという。そんな企業側の支援や周りの人々のサポートで、父は今日も、持病を患う以前と同じように社会人を続けることができている。

父の絶え間ない努力と企業側の支援を知り、胸が熱くなった。年相応に出世し、地位や名声を手に入れることが本当の働くことの価値なのだろうか。きっとそうではない。父は、レールの上の台本通りの人生の代わりに、もう一度上を向いて生きることを意味を見つけたのだ。“働くこと”はどんな形だっていい。父は父のペースで、父の働き方で、今日も私たちの暮らしを支えてくれている。

私の兄は、コロナ禍による就職氷河期の真っ只中、いくつもの挫折を乗り越えて夢を掴んでみせた。かつての父と同じ職業だ。そして数社貰っていた内定の中から、父の勤めていた会社を選んだ。持病のせいで泣く泣く歩みを止めてしまった道を、これから息子が歩んでゆくのだ。“働くこと”を通した兄なりの親孝行なのだろう。兄の顔は希望に満ちている。我が家にも一筋の光が差し込んだ。

次は私の番だ。

幼い頃から、経済的な面からも、家から通える大学に行ってほしいと言われてきた。しかし私が魅力を感じたのは県外の大学だった。父にも母にもこれ以上の負担をかけたくはない。諦めようかと思ったとき、母は言った。「子供は親の生き甲斐。やから子供のことは何だって、親にとってのやり甲斐。」

今は、その言葉に甘えてもいいだろうか。父と母からのエールは、いま私の最大の力になっている。だから私からは2人に感謝を伝えたい。

お父さん、お母さん、働くあなたたちの背中には本当にかっこいい。2人を心から尊敬しています。胸を張って自慢できる最高の両親です。だから私も進み続けます。あなたたちと抱き合い、喜びを分かち合える日まで。



入 選



大学生部門

ノートルダム清心女子大学 2年

上野 未結

早稲田大学 1年

桐生 莉緒

高校生部門

湘南白百合学園高等学校 1年

五十嵐 咲絢



ダイバーシティ教育推進学校賞



おかやま山陽高等学校

創志学園高等学校

津山工業高等専門学校

清心女子高等学校

(50音順)

CASE STUDY 9

Companies

多様なライフスタイルを

支える働き方や

働きやすい職場環境づくりに

積極的に取り組んでいる企業紹介

「仕事と育児や介護の両立」「少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少」「ニーズの多様化」など、それぞれのライフスタイルは本当に様々です。自分のライフスタイルにあった働き方を見つけるためには、まずどんな「働き方」があるのかを知ることがとても大切です。この冊子では、働き方改革や働きやすい職場環境づくりに取り組む企業9社の事例をご紹介します。企業選びや社内改革のヒントになれば幸いです。

● 取り組み内容

「働き方の改革」に取り組み、働く方の声を2000件以上集めて形にしているところです。育児休業は2歳まで、小学校2年生終了まで育児時短制度があり、介護休業は1年半まで、介護時短制度は、3年まで利用できます。妊娠したことの申し出があった場合、利用できる制度・給付のご案内を個別にしています。また、家族の介護について相談があった場合も同様です。育児及び介護休業中の職員へ、毎月部内報や学習資料等を送り、感想や近況報告返信などのやりとりをしています。『仕事と育児の両立』などをすすめる事業主として、岡山県内で最初に『くるみんマーク』の認定を受けました。また、2007年度『雇用均等・両立推進企業表彰ファミリー・フレンドリー企業部門』で、その年全国唯一の厚生労働大臣優良賞も受賞しました。また、2019年4月『プラチナくるみんマーク』の認定も受けました。

● 事業内容

岡山県内で34万世帯(組織率40%)の組合員さんへ宅配事業や店舗事業を通して食料品・日用品等を供給しています。福祉事業、共済事業、旅行等のサービス業も行う総合生活関連組織として活躍しています。

URL www.okayama.coop



上：えるぼし認定証交付式
下：新入協職員

● 取り組み内容

- ①リフレッシュデーの設定 毎週水曜日をリフレッシュデー(ノー残業デー)と設定しています。
- ②短時間勤務制度 満3歳に達するまでの子供を養育する場合は1日120分、満3歳から小学校1年生年度末までの子供を養育する場合は1日60分を限度に就業時間を短縮できる制度があります。
- ③育児休職者交流会 年1回育児休職者に対して、社内周知事項の共有や育児休職者同士の情報交換の交流会を実施しています。
- ④がん治療と仕事の両立支援制度 完治のための治療を受けながら働けるよう、治療計画に合わせて就業時間を短縮できる制度があります。
- ⑤こども参観日 夏休み期間に従業員の子供が親の職場や仕事を見学できる機会を提供しています。

● 事業内容

当社は村田製作所グループにおいて、移動体通信機器市場をメインターゲットとする主要生産拠点です。最新電子デバイスを設計・供給することを通じて、もっと「つながる」社会の実現に貢献しています。

URL corporate.murata.com/ja-jp/group/okayamamura



上：こども参観日
下：育児休職者交流会

● 取り組み内容

片山工業では、『社員は最も大切な財産である』という理念のもと、仕事・家庭・子育てを支援する取り組みを積極的に実施し、社員が働きやすい職場環境を整えています。

- ①事業所内保育所(おもいやり保育園)を2013年に開園
- ②柔軟な働き方ができるよう非製造部門でフレックスタイム制度を導入
- ③育児短時間勤務を小学校就学前までに拡大
- ④看護休暇・時間外勤務の制限(1ヶ月24時間以内)の適用範囲を小学校3年生修了までに拡大
- ⑤2018年1月に妊娠通院休暇制度を導入
- ⑥毎週水曜日・金曜日を「ノー残業デー」に設定
- ⑦失効する有給休暇を育児等で使用できるように積立有給休暇制度を導入
- ⑧男性の育児休暇奨励(取得実績6名)
- ⑨家族を対象とした職場見学会「Katayamaファミリーデー」を開催

● 事業内容

各種自動車用部品、福祉機器、ウォーキングバイシクル、金型・専用機等の製造、及び弁当の調理・宅配 ほか
URL katayamakogyo.jp



上：おもいやり保育園のハロウィンの様子
下：ファミリーデー



● 取り組み内容

「働きやすさ」と「働きがい」をともに高めるために
①短時間勤務者の日数限定フルタイム勤務制度の導入
育児の短時間勤務は小学校3年生修了まで、勤務時間は7パターンから選択可能で、制度の利用者は現在約90名。多様な働き方を支援するため、本人希望により日数限定でフルタイム勤務日も設定可能に。両立支援とキャリア形成をともに実現します。女性だけでなく男性も制度活用しています。
②次世代リーダー育成プログラムを実施
男女ともに次世代リーダー育成を図るため、若手の成長につなげていくプログラムを実施しています。仕事の面白さを実感できる「売場づくり」や「イベント企画」等のテーマに沿って、人づくり改革を推進しています。

● 事業内容

中国地方に5店舗を展開している地方百貨店です。
『ありがとう』があふれる地域一番の“おもてなし感動デパート”を目指して、地域密着型の店舗づくりを追求。百貨店事業を中心に多様なグループ企業を展開しています。
URL www.tenmaya.co.jp/jinji/



上：天満屋岡山本店外観と「くるみん」マーク
下：社員の働くイメージと「えるぼし」マーク



● 取り組み内容

- ・間接部門と一部直接部門においてフレックスタイム制を導入済み
- ・事由を問わず全社員が可能なテレワークやサテライトオフィスでの勤務
- ・短時間勤務制度、短日数勤務制度を導入済み
- ・育児中社員を対象としたキャリアデザイン研修や、休職中・復職前面談の実施によるスムーズな復職へのフォロー
- ・LGBTに関するセミナーの実施
- ・特例子会社の事業領域拡大による障がい者の自立支援
- ・「子育てサポート企業」として厚生労働大臣の認可を受けた証である「くるみん」に5回認定

● 事業内容

JR西日本は安全を第一に、お客様から安心、信頼していただける鉄道づくりを進めるとともに、駅という拠点を活かし、さまざまなビジネスを展開することで、地域の発展や活性化に貢献しています。
URL www.westjr.co.jp/company/recruit/fresh/



上：サテライトオフィス勤務
下：育児中の社員を対象としたセミナー



● 取り組み内容

当社は社会課題をICTで解決する「ソーシャルICTパイオニア」をめざしていきます。さまざまなお客様や地域のニーズにお応えしていくには、社員ひとりひとりの能力や価値観を活かすこと、すなわち“ダイバーシティ&インクルージョン”が不可欠です。女性、障がい者の活躍推進はもとより、全社員が主役となり内面的な「ちがいを」価値として業務や経営に活かしていきます。
また、在宅勤務制度や育児・介護のための時短勤務、ライフプラン休暇などの柔軟な働き方を実現する制度に加え、「社内ダブルワーク」等、社員のチャレンジを組織全体で応援、後押しすることで「認める風土」を醸成し、多くの社員が積極的にチャレンジできる輪を広げていきます。

● 事業内容

NTT西日本は、24時間365日「つながるあたりまえ」を守り社会全体を支えるとともに、世の中のあらゆるものとICTを組み合わせ、山積する社会課題をお客様とともに解決し、もっとワクワクする未来を創造していきます！
URL www.ntt-west.co.jp/diversity/



上：男性社員の育児参画に向けた取り組み
下：働く場所の選択肢拡大を目的としたサテライトオフィス



日産自動車株式会社

● 取り組み内容

- ・ワークライフバランスの推進：在宅勤務の活用や有給休暇取得促進、労働時間のモニタリング、ノー残業 DAY の設定、週間 PDCA の推奨など長時間労働の削減や生産性向上に繋げる取り組みを推進。働き方改革“Happy8”プログラムを導入し、個人と組織の生産性を上げ、仕事も生活も健康も充実することを目指しています。
- ・ダイバーシティの推進：文化的背景への理解を深め、相手の仕事のスタイルを学ぶことを目的とした「カルチャーダイバーシティ研修」を開催。お客様に多様な価値を提供するために、各プロジェクトや組織のリーダーとなる管理職候補が将来に向けて準備するトレーニングなどキャリア開発の支援を実施しています。

● 事業内容

日産は世界20の国に生産拠点をもち、160か国以上に販売網を持つグローバルな自動車メーカー。オープンマインドな社風と、職位やセクションの枠を越えて『より良いクルマ作り』のために行動できる環境があります。

URL www.nissan-global.com/JP/COMPANY/DIVERSITY/RECOGNITION/



上：社内託児所 まーちゃんど
下：働き方シンポジウム



株式会社ミスターサービス

● 取り組み内容

- 従業員9割以上が女性の当社では、創業当時から「女性が長く安心して活躍できる職場」を目指し様々な取り組みを行っています。
- 正社員、フルタイムパート、短時間勤務、家庭内職など、ライフスタイルに合わせた働き方を整備
 - 仕事と家庭の両立支援に積極的な企業として岡山県から「おかやま子育て応援宣言企業」に認定
 - 全従業員の小さな頑張りを評価し、仕事に楽しみ、やりがいを持ってもらうため、「ポイントカード」制度を導入
 - 社内コミュニケーション活性化のために「サンクスカード」制度を導入
 - 従業員目線での働きやすさを重視するため、社内や業務のルール制定や改定、職場の環境改善活動などを、従業員だけで組織する委員会で運営

● 事業内容

全国の企業の人手が必要な困り事ニーズを解決するアウトソーシングサービスを提供。人材派遣、社内請負、企業内請負、家庭内職、求人サイトの運営など、多角的なサービスで企業の問題をコンサルティングしています。

URL www.mr-service.jp/



上：サンクスカード
下：ポイントカード



社会福祉法人明光会

● 取り組み内容

事業内容(保育・障害者支援)の特性から、女性が多い職場であり、女性の活躍が、事業推進の大きな原動力となっています。このような現状の中、男性、女性に関係なく、「長く安心して働き活躍できる職場環境」を整備していくことは、仕事と子育ての両立だけでなく、人材確保・人材定着の面からも重要であると考え、以下のことに取り組んできました。

<具体的な取り組み>

- ①適正な労働時間の管理と事務処理の見直し、簡素化
- ②一人当たりの年次有給休暇取得率50%達成
(2019年度取得率：71.5%)
- ③男性職員の育児休業取得促進(取得実績3名)
※今年度、新規1名取得
- ④育児短時間勤務制度の対象を小学校就学前までに拡大

● 事業内容

浅口市内に保育所2か所、障害者支援施設1か所の計3事業所があり、関連事業としてグループホーム、相談支援事業を実施。「必要な支援を、必要な人に、必要な時にさりげなく提供すること」をモットーとしています。

URL www.meikoukai1970.com



上：女性管理職・リーダーも多く在籍！女性が活躍中！
下：次世代リーダー育成研修の様子

ABOUT US

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま

当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。

構成団体 国立大学法人岡山大学
一般社団法人岡山経済同友会
岡山県
事務局 株式会社ロゴデザイン